

## 子宮内膜症と各種疾患(2)

子宮内膜症と生活習慣病  
—子宮内膜症の心血管疾患リスク—

若槻 明彦

## Summary

子宮内膜症患者は慢性的な炎症の活性化、抗酸化因子の減少による酸化ストレスの亢進、内因性 NOS 抑制因子の上昇などにより、血管内皮機能は低下している。血管内皮機能の低下は将来の心血管疾患 (CVD) の発症リスクといわれており、疫学研究においても子宮内膜症は CVD リスクであることがわかっている。外科的に子宮内膜症の病巣を除去すると、血管内皮機能が改善し、炎症マーカーも低下することが報告されている。また低用量エストロゲン・プロゲスチン配合薬 (LEP) は子宮内膜症術後の再発予防効果があるのみならず、血管内皮機能の改善効果もあるので、CVD リスク低下の可能性もある。

## Key words

子宮内膜症  
炎症  
心血管疾患  
血管内皮機能  
ホルモン

## はじめに

子宮内膜症は月経痛、腰痛、排便痛、性交痛などの症状や、不妊症、卵巣チョコレート嚢胞などを合併することがあり、性成熟女性の QOL を低下させる代表的な疾患である。治療は疼痛管理が中心で、低用量エストロゲン・プロゲスチン配合薬 (low dose estrogen progestin ; LEP) や黄体ホルモンは月経痛に効果的であることに加え、卵巣チョコレート嚢胞の手術後の再発予防効果もある。一方、子宮内膜症は慢性炎症性疾患でもあることが知られている。炎症が長時間持続すると、将来の動脈硬化性疾患に発展することがわかっており、クラミジア肺炎や齲歯などの慢性炎症性疾患は冠動脈疾患のリスクであると報告されている<sup>1)2)</sup>。子宮内膜症の場合も同様に、発症してから閉経まで数十年間、慢性的な炎症にさらされるため、将来の動脈硬化性疾患に進展する可能性がある。実際にわが国や海外の疫学研究で子宮内膜症が心血管疾患 (cardiovascular disease ; CVD) リスクであると報告されている<sup>3)4)</sup>。したがって、本疾患に対する治療は疼痛や不妊に対してのみならず、CVD 発症に対する予防医学的な観点からの対策も必要である。

本稿では、われわれの行った子宮内膜症女性における血管内皮機構に関する研究成績と、子宮内膜症が CVD リスクであるとの国内外の疫学的報告、さらには CVD 予防の観点からみた子宮内膜症の適切な治療方法についても解説する。

Akihiko Wakatsuki

愛知医科大学医学部産婦人科学教室教授